



未然防止に取り組む ～「生徒指導提要」改訂のポイント～

平成22年（2010年）に学校・教職員向けの基本書として作成された「生徒指導提要」が12年ぶりに改訂され、生徒指導の考え方が変わったと聞きます。どのように変わったのですか。

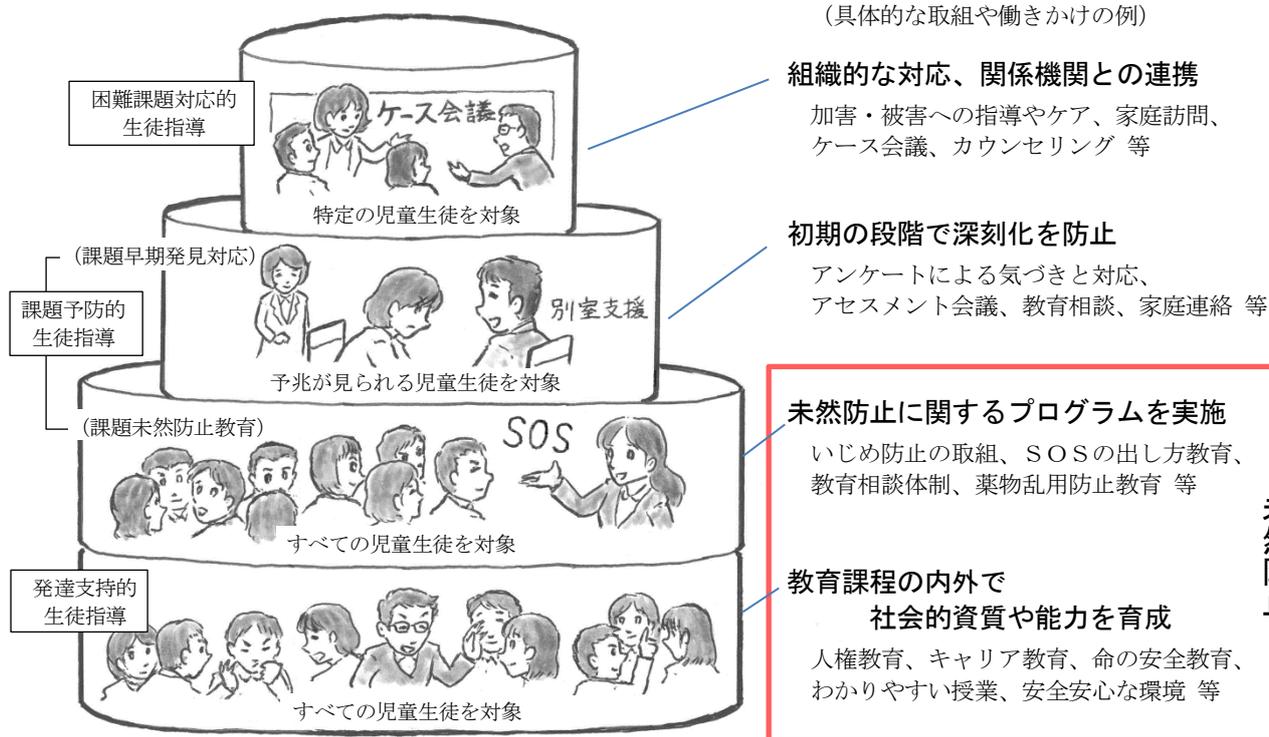
今日的な課題に対応するため、「生徒指導提要」（文科省）が、令和4年12月に改訂されました。改訂により、近年深刻化する課題を解決するためのポイントが具体的に示されました。

1 積極的な生徒指導（生徒指導上の課題の未然防止）

従来の生徒指導は、問題行動への組織的対応や予兆への早期対応が重視されました。今回の「生徒指導提要」では、生徒指導の諸課題の未然防止が重要であるとして、すべての児童生徒の成長を促す指導に積極的に取り組むことが盛り込まれました。

問題が起こってからでは難しい対応を長期間強いられ、児童生徒・保護者や教職員が傷ついたり疲弊したりします。未然防止に取り組むことは、最大の業務改善にもなります。

生徒指導の重層的支援構造



2 生徒指導と教育相談が一体となったチーム支援

担任1人でなく、教職員や専門家、関係機関がチームを組み、アセスメントに基づいて役割分担をすることで、指導の幅が広がります。アセスメントが、チーム支援の成否の鍵です。

3 学習指導と関連付けながらの生徒指導

教科の目標と生徒指導のつながりを意識した教科指導が重要です。個に応じた指導とともに、児童生徒間の交流を図り、自己存在感を育む授業の工夫が求められます。

不登校の未然防止 ～「だれもが行きたくなる学校づくり」～

不登校になった子どもへの手立てだけでなく、新たな不登校を出さないことが大事だと思うのですが、不登校になる前のアプローチとして具体的な手立てはありますか。

社会性が育っていない現代の子どもたち

「学級再生」小林正幸 参考



問題行動の未然防止

人間関係づくりのプログラムを
取り入れる



昨年度、全国の不登校の子どもは29万9000人を超え、10年間で小学生は5倍に、中学生は2倍に増えました。教育相談や別室支援などの早期対応に努めていますが、不登校の増加傾向が止まりません。

今の子どもに社会性が育っていないことが根本にあると考えた岡山県総社市は、「だれもが行きたくなる学校づくり」として、平成22年から全児童生徒を対象の不登校未然防止の取組を続けて成果を上げています。

1 「だれもが行きたくなる学校づくり」4つの柱

(1) 社会性と情動の学習 (SEL)

ストレス・マネジメントやアサーション・トレーニング、アンガー・マネジメント等を系統的に学習する。

- ➡ 自己や他者の感情を理解する。
- ➡ 感情の統制、適切な表現、他者と関わる力を育む。

(2) ピア・サポート

学級、学年、異学年、異校種で児童生徒が相互に支え合う活動を設定して、実体験を重ねる。

- ➡ 自己有用感を高め、モデルを獲得させる。
- ➡ 思いやりのある子どもや学校風土を育てる。

(3) 協同学習

すべての授業にコミュニケーションの場を設定し、ペアやグループの活動で感情、役割、思考の交流を行う。

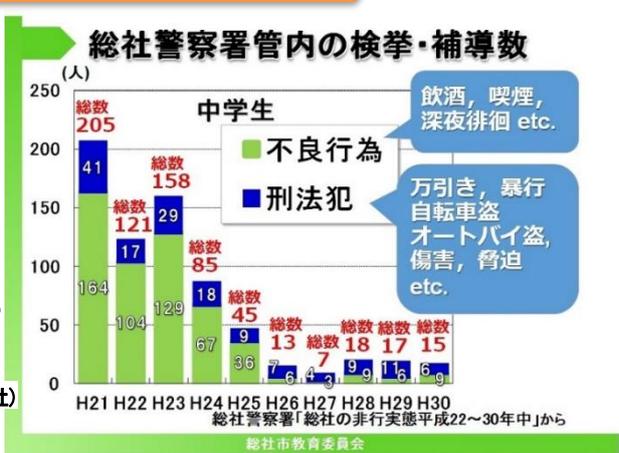
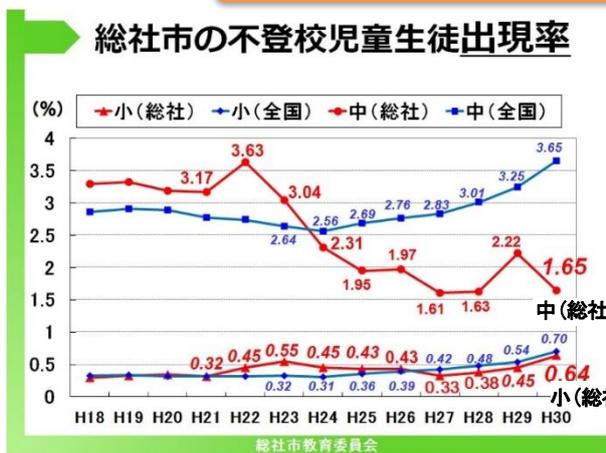
- ➡ 良好な人間関係を築き、学習意欲を向上させる。

(4) 品格教育

よい行動の指標を学んで、振り返り、仲間と磨き合う。

- ➡ よい習慣を形成し、規範意識を向上させる。

2 「だれもが行きたくなる学校づくり」取組の成果



【参考】「生徒指導提要」文部科学省

「だれもが行きたくなる学校づくり」「〃 成果と検証」「〃 入門」岡山県総社市HP
「学級再生」小林正幸 講談社現代新書(絶版)